

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと風

第193号（2022年6月）

常世の風に吹かれて呟いて（1） 白井啓治

（今回より白井啓治氏の10年前のブログ記事から一部を抜粋して連載します。）

『庭に真つ赤な実が二つ ヘビイチゴ』

（2012年6月7日）

お猫様、お大様のブラッシングを終え、庭を見回っていたら、露の葉の陰にパチンコ玉よりも少し大きな真つ赤な球が見えた。余りにも鮮やかな赤だったのでなんだろうと露の葉をかき分けて覗き見たら、何とヘビイチゴの実であった。食べられるヘビイチゴではなかったが、大層嬉しい気分にさせられた。このヘビイチゴは田の畔や湿った草地に生え、どこでも見られるのであるが、庭に真つ赤な玉が点々とあるのはなかなか華やいだ感じがする。見つけたのは真つ赤な玉二個であったが実に良いものである。

ヘビイチゴは食べられないものだから、忌み嫌われていたヘビが食べると言われ、そんな名がついたであろう。同じヘビイチゴの名がついていてもシロバナヘビイチゴは甘くいい香りがする美味しい野イチゴである。

今日もNHKが稽古の取材に来ていた。ユツキーちゃんすっかり張り切って、なかなかいいイメ

ジの舞を創造してきた。来週火曜日に、久美ちゃんやピアノの光ちゃんとの通し稽古を行うのであるが、ここにも取材が入るのでどんなふうになるか楽しみである。

明日、久美ちゃんと光ちゃんが稽古をすることになったのであるが、小生は会報の編集で残念ながら出かけることができない。火曜日を待つしかない。



（絵： 兼平智恵子）

『真つ赤なイチゴの笑顔も忘れて振じり鉢巻き』

（2012年6月8日）

毎月の事であるが月初めの金曜日は大変な一日である。第一もしくは第二土曜日がふるさと風の会の会報を印刷する日なので、その前日の金曜日は他の事が全くできない一日となる。今月は少し余裕をもってやりたいものと思っても結局ギリギリまで編集・割り付け作業ができないのである。疲れたー。本当に疲れたー。

今日は朝から、お大様を病院に連れて行かなければならず、作業が二時間ほど損をしてしまった。

ふるさと風の会会員募集中！

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

会費は月額2,000円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

木下明男 090-4715-5527 兼平智恵子 0299-26-7178

伊東弓子 0299-26-1659 木村 進 080-3381-0297

編集事務局 〒315-0014 石岡市国府 4-3-32（木村）

HP <http://www.furusato-kaze.com/>

今日の二時間は大きいのである。お大様、後ろ足の膝を痛めたらしくビッコをひいているので、病院に連れて行かないわけにはいかない。どうやら膝のお皿を痛めたらしい。

結局、午前中を潰されてしまったので、午後は昼寝もできず会報の編集作業に没頭した。ようやく編集作業が終わりホッと一息ついたら、外はもう真つ暗である。そうしたら昨日見つけたヘビイチゴの事が気になりだして、さつき懐中電灯を手に見に行ってきた。そうしたら一個なくなっていた。虫が食べたのか、小鳥がついばんでいったのか、一個のイチゴの赤が寂しそうな感じであった。

常世の国の朗読物語『恋瀬川物語』

兼平智恵子

あなた。

私に百の恋をくださいますか。

私は百の舞にお返しいたします。

父は言った。

母も言った。

「恋瀬の川の

橋は渡るな」

と。

父は言った。

母も言った。

「恋瀬の川の橋は渡るな」

と。

私はズーッと、それを守ってきた。

父は言った。

「恋瀬の川の橋を渡ったら、

女はふるさとを捨てる」

と。

——恋瀬川物語 前文

今回の「朗読物語」の紹介に入ります。

常陸の国の恋物語百（第一話・旅立ちの章）

恋瀬川物語

著者 白井 啓治

発行 ふるさと風の会



舞う小林さん

朗読者 白井 啓治
手話舞 小林 幸枝

現在の石岡市内には、三本の川が流れています。恋瀬川と山王川、そして園部川、それぞれが建設省の一級河川に設定されている。（いしおか昭和の肖像より）

山王川は龍神山周辺を水源とし、園部川は八郷地区の難台山一帯を源としている。

これらに比べて、恋瀬川は筑波山から加波山にかけての広い地域を源としている。全長約三十キロ弱の恋瀬川は、此の中で一番大きな川で古来から石岡の人々に恩恵とやすらぎを与えてきました。

この恋瀬川を背景に恋物語が展開されます。恋のお相手から、古今集の恋歌の一首が届けられる。

その恋歌を恋瀬の川風にのって、思うが儘に、自由に自在に舞う。果たして恋の行方は……………。

ふるさと風の文庫でお楽しみ下さい。



恋瀬川より

ここで恋瀬川の名前の由来が気になります。

恋瀬川については諸説があり、今回は「石岡の地名」から（昭和六二年 岩田敏男「石岡市地名考」）より抜粋します。

『現在、恋瀬川と呼ばれている川は、常陸国風土記では「信筑之川」であり、府中雜記、常府総覽記では「表川」であり、新編常陸国誌では「信筑川、下流は中津川」と呼ぶ。

全流を恋瀬川と統一されたのは、多分、明治十七年参謀本部陸軍部測量局による、日本地図作成の時のように思う。

明治十七年八月測量石岡地方二万分の一地図では、恋瀬川と統一されているからである。恋瀬川名がはじめてこの川につけられたのは、天明年間（一七八一〜一七八九）ではないかという。

中津川架橋を公に願ひ出る際に、平凡な中津川よりも、歌枕で有名な恋瀬川の方が役所の通りがいだらうと、村役が協議し、中津川を恋瀬川として願ひ出たのが最初という。』

筑波連山から流れ出る数々の川が合した恋瀬川は舟運に利用され、高友、川又、根古屋、五輪堂に河岸が設けられ、ベカ舟（川船の一つ。薄板で造り、江戸時代に利根川支流などで水運に用いた）が薪炭、竹木、石類等を積んで上下するようになり昭和初期まで隆盛を誇っていたそうです。

恋瀬川が注がれる高浜の海、見おろす事が出来ます。是非ご覧なる事お勧めします。

まず高浜街道通り高浜神社に、街道に沿って車二台駐車できる所があります。すぐに丁字路の信号を通り越して間もなく、左側に、親鸞聖人が平石に爪で描いたという謂れのある阿弥陀碑のある、爪書き阿弥陀堂に到着です。此の裏にあります白

い手すりの階段を上ります。四十三段目で一休み、それから三十段、どうぞ体調の良い時にいらして下さい。

八郷地区方面より府中橋、恋瀬橋、平和橋、愛郷橋を潜って悠々と霞ヶ浦に溶け込んでいく恋瀬川。

そしてそれぞれの橋上で筑波山と恋瀬川………お楽しみ下さい。

○もう次の原稿 一か月老いて 智恵子



我が人生の回想5

木下明男

幼年期から、少年期へ……？

1943年12月……戦況が厳しくなってきた時期に江東区で生まれる。前回記述したよう

に、戦時下と戦後すぐの記憶としては全く覚えていない？戦後すぐの時期は行政も乱れており、諸々の秩序が保たれておらず、闇屋等が横行していた。私の戸籍が復活された折も、それまでの名前が人名登録で拒否され（彦が禁止？）アキヒコ→アキオにされた。おかげで暫くは、叔父叔母たちからは旧名で呼ばれ続けた。

東京など河川の堤防が充分に整備されていない時期、カスリーン台風（S22年）・アイオン台風（S23年）・キティ台風（S24年）が毎年のように関東や東北を襲った。（此の頃はアメリカ統治下で台風は女性の名前が付けられていた）河川の氾濫（隅田川）で我が家も床下浸水の被害があった。未就学でもあったので、この時の記憶がPTSDとなり台風が恐怖だった。ある時、台風が襲来し隅田川が氾濫したとの情報があり、親から水が何処迄来ているか見て来い……と言われ、怖くて動けなかったのをよく記憶している。此の時期（S20年代前半）東京の多くは、上下水道が完備されておらず、道路を覆った水には汚い等が浮かんできて衛生上不潔極まりない？飲料水は共同水道……各家庭に水道が引かれておらず数件共同で使用。各個で蛇口の開閉ができるカギを使って水を汲み、大きなバケツで家に運び飲食に使用。そして、竈とお釜で飯炊き……子供の役割、煮物等はガスがあつたような気がする。ごみごみとした狭い勝手口で、生火（薪）を使つてのご飯炊きは得意だった、今考えると危険極まりない、此の頃火事は多かったような気がする。

S20年代中頃、お隣の国で戦争が始まり急速に景気が良くなつて（朝鮮特需）此の頃より、諸々の生活が向上し始める。上下水道の完備も此の頃

だった。戦後のベビーブームで、各家庭は子供が多く景気が良くなつたとはいえ生活は厳しかった。多くの一般家庭では、低所得を乗り切るために、内職と呼ばれ家庭内で行われる下請け仕事が行われていた。鼻緒の綿入れや甘納豆の袋入れ……等々があつた。主婦は、家族の朝食作り後、掃除（ハタキと箒）玄関前の道路で洗濯（盥と洗濯板）水汲み、それらが終わると買い物（夕食他）そして夕食の準備、夜は内職……。どここの家庭でも似たり寄つたりの生活だった。

テレビもゲームもない、居るスペースもない家には……当然のように外遊びである。ガキ大将（小学高学年）の元、近所の子供たちがつるんで遊ぶ。面子（めんこ）やビー玉、ベーゴマ、ポン（紅梅飴の付録のカード）、チェーリングなど子供たちの賭け事やグループ遊びのかくれんぼ、缶蹴り、飛び馬、溜め鬼、だるまさんが転んだ、はないちもんめ、かごめ、三角ベース、石蹴り……女の子の子は、毬着き、お手玉、おはじき、ゴム飛び等。季節では正月に凧あげや羽子板、コマ回し、正月飾りの竹で竹刀を作り、隣町内のグループと戦争ごっこ。夏休みには小一時間ほど歩いて荒川の河川敷に行き（お弁当持参）、そこで泳ぎを楽しんだ。学校を始めとして、公私でもプール等の施設はなく、海水浴にもなかなか行けなかった。

また、家族でかるた、双六、トランプ等々工夫に富んだ遊びを作るのが此の頃の子供たちだった。テレビがない時代は、ラジオが家族共通の娯楽。ラジオ番組で覚えているのは、「鐘の鳴る丘」川田正子が歌う「緑の丘の赤い屋根」とんがり帽子の時計台 鐘が鳴ります キンコンカン……「笛吹き童子」へヒヤラリーヒヤラリー ヒヤリーコヒ

ヤリコ〜。『三太物語』へおいらは道志の三太と申す〜。『君の名は』へ君の名はとたずねし人あり〜。『バス通り裏』へ小さな庭を真ん中に〜。『風雲黒潮丸』へ黒潮騒ぐ海超えて 風にはためく三角帆〜。『赤胴鈴之助』へ剣を取っては日本一に〜。『三つの歌』『20の扉』『話の泉』『とんち教室』『のだ自慢』『お父さんはお人よし』『少年探偵団』ざっと挙げててもご覧の通り、幼少期の記憶は根深いですね？

また、ラジオを通して流れた戦後期の流行歌は・・・『青い山脈』藤山一郎／『リンゴの唄』並木路子／『湯の町エレジー』近江俊郎／『悲しき口笛』美空ひばり／『長崎の鐘』藤山一郎／『異国の丘』竹山逸郎／『東京ブギウギ』笠置シズ子／『憧れのハワイ航路』岡晴夫／『かえり船』田端義夫／『泣くな小鳩よ』岡晴夫・・・等であった。昭和25年以降は、『リンゴ追分』美空ひばり／『岸壁の母』菊地章子／『お富さん』春日八郎／『君の名は』織井茂子／『上海帰りのリル』津村謙／『テネシーワルツ』江利チエミ／『雪の降る町を』高英男／『東京キッド』美空ひばり／『高原列車は行く』岡本俊郎／『白い花の咲く頃』岡本俊郎

こんな時期に、大阪に労音運動が起こり、5年後東京にも労音が誕生した。

地域に眠る埋もれた歴史(81)

木村 進

【常陸国における親鸞の足跡】(7)

明円寺(石岡市真家)

山伏弁円についても少し調べてみました。弁円についても生まれなどはいくつかの説があるようです。

幼い時に三井寺(滋賀県大津市)に入り播磨坊弁円と称したとされ、平清盛の孫で平家滅亡の時に四国伊予に落ち延びたとする説があるといえます。はつきりしたことは不明ですが、この播磨坊弁円を常陸太田に居を構えていた佐竹秀義が招き、塔の尾(現在の常陸大宮市東野)に祈願所法徳院を構え、山伏など修験者約800人が集まっていたというからかなり大きな道場があったとされます。弁円が親鸞を襲ったのは親鸞49歳、弁円42歳の時です。弁円は親鸞の弟子となり「明法房」の名前をもらいます。

親鸞には関東に24人の弟子がおり、24輩と呼ばれています。

明法房はその19番です。

嘉禄二年(1226)明法房は檜原山法徳院法専寺を創建し、建長三年(1251)73歳で往生して旧法徳院跡地に葬られました。現地には「明法房の塚」として碑が建っています。

明法房が読んだ歌として、前回の懺悔の時の歌ともう一つが知られていますので載せておきます。

あだとなりし 弓矢も今は 引きかえて

西に入るさの 山の端の月

さて、明法房が創建した寺(第19番)は額田の上宮寺とされています。

上宮寺は明法房が69歳の時に建てたが、これを明教房に譲り、思い出の石岡の真家村に一字を建て、明法房の明と弁円の円の字をとって「明円寺」としたと言われています。

この明円寺は弁円(明法房)の寺ですが、他の2つの寺(那珂市本米崎・上宮寺、常陸大宮市東野・法専寺)に比べあまり知られていないようです。



真家のお盆祭りである「みたまおどり」は平安時代から伝わるものとして知られています。この祭りは毎年8月15日の朝、この明円寺からホーイ・ホーイの掛け声から始まります。

弁円（明法房）が建てた明円寺は現在の場所より800mほど山を登った場所にありました。しかし、天明6年（1786）の時に発生した山津波で堂宇はすべて流されてしまいました。

その後復旧しますが、安政元年（1854）に火災で焼失し、現在の建物は慶応2年（1866年）に再建されたものだそうです。

また明法房が亡くなったことを聞いた親鸞は「かえすがえすもうれしそうろう」と手紙に残されたと伝えられています。

親鸞の教えが少しわかるようなエピソードです。

籠が待っているのは

伊東弓子

私が、偶に犬と散歩する道がある。そこを通ると、まささんのことを思い出す。土地がなかった祖父母の時代、働いて働いてやっと手に入れた山合の一面を開いて畑にしようと言っていた。決して広くはない。十年以上経った栗の木が十本位ある所、その畑の隅に背負籠が今も転がったままある。その先も延々と小山が続く所だ。

まささんとゆっくり話したことがあった。今はもういない。懐かしい人だ。

ある春の日の午後、山の畑から夫が跳ぶように戻ってきたそうだ。「赤紙が来た。赤紙だ。」と言いながら、振り回しているのは、召集令状だった。ただただ狼狽えている様子で、「俺も一端の男にな

った」と、叫んでいた。とはいえ、心の中は複雑だったことだろう。大人四人と子供三人を残していく身はどんなに辛かったろう。無事に戻ってきたいなど口に出せない。又あり得ない。死を覚悟してのことだったろう。心の奥底は知ることも出来ない。（後から分かったことだが、当時は戦争末期だったそう。三十代半ばの人までもどんどん駆り出されて行った時代だった）夫が持つて行った筈の背負籠は我家にとつて大きな財産のひとつだったが、でもそんなことを言ってる時ではないし、菊にも聞けず、その儘にした。出征の日までは長いようでもあり、短いようでもあった。ゆっくり話をする間もなかった。周りの目もあつて涙など流す素振りも見せまいとして見送った。

・・・・・・・・

それから、七人（八十代半ばのお爺さん、六十代半ばの両親、自分、七歳の長女、五歳の長男、生まれてまもない次男六か月）の生活が始まった。

春の彩りは忙しい心身の疲れを癒してくれた。

やがて夏、汗グシヨ・グシヨの一日一日が続き、蚊に悩まされても、子供達の寝顔に癒されて熟睡した。

秋の実りは心配だった。自然の営みによる恵みに恵まれ、男手のなかったことの心配も助け人もあつて大助かりだった。家族もよく働いたことは言うまでもなかった。病気や怪我もなかったことは有難かった。

近所、隣りも「子供にやれ、年寄りにやれ、おめえも確り喰え」と、助けてくれた。一つ一つが有難いことだった。親戚の人達が、盆だ、彼岸だ、鎮守様の祭りだ、とやってきて、にぎやかだったのも気が紛れてよかった。皆それぞれ、土地土地

の物を下げてきてくれた。「乳はでつか。子供ら弱いとくさっぱが出来つか」と、その時は、「ああしろ、こうしろ」と、世話焼きの言葉も煩いほどだったが、有難いと思うように心がけたそうだ。冬の訪れ、木の葉が散って草が枯れた頃、一枚の便りが届いた。

「父ちゃんは元気でお国のために働いています。そちらは寒くなったでしょう。こちらは暑い国です。この国のお姉ちゃん、爺ちゃんの絵葉書を送ります。おつきいお爺ちゃん、爺ちゃん、婆ちゃん、母ちゃんの言うことをよくきいて姉弟仲良くして元気でいてください」。みんな嬉しくて何度も何度も読み返し喜び合っていた。

正月が着て、何となく待たれる気持を持ちながらいたが、家族にとつても、まさにとつてもそれが何なのか、希望ともつかず、不安ともつかないものが心を駆け巡り、暗いものがだんだん大きくなっていくような「気がした」。

その不安は当たった。一通の知らせが届いた。

【南方で戦死した】という知らせだった。詳しいことは分からない。力がぬけて沈黙の時間が続いた。もう絶望・谷底へ落されたようだった。遺骨を取りに行ったが、軽いものだった。あんなにがつちりした男がこんなに軽くなったかと、姑は泣き崩れ、爺さん二人は声も出さず仏壇の前にうずくまっていた。婆ちゃんと大きい子二人は骨箱を抱えたまま離れない。伝え歩きが出来るようになった末っ子も鬱囲気を感じてか、まさの着物にしがみついていた。

さあ、これからだ、と、まさは立ち上がった。組の人の集まりで、役割・準備・日程・片付けまで決まった。そして葬式の準備をどんどん進めて

くれている。葬式使いがあちこちに知らせに行く。坊さんの所へ、役場へ、帳場は物置前で、勝手場と井戸端利用の仕方、買物に行く人など動きだした。知り合いが来てくれる。親戚が来てくれた。

米が届く、酒や醬油が届く、野菜が届く、人間一人が亡くなるということは、こんなにも沢山の人が助けてくれるものか、沢山の人が悲しんでくれるのか、と重みを感じて有難かった。こんなに一生懸命している人たちに皮肉にも雨が降ってきた。通夜も葬式の日も雨だった。帳場も井戸端も筵を下げたりして少しでも雨を避けようとして作業していた。小さな家でいっぱいになり、坊さまもみんなの前で着替えて読経が始まった。

何処でもそうであるように帳場と炊事場は通夜・葬式という場も構わず、音を立て、加減なく声が続く、いわゆる世間話だ。別れの膳もすんで読経が始まって止まなかった。当家や親戚の啜り泣く中でもお喋りは続いた。止める人もいないようだ、と、まさもこういう場に関わって初めて分かったことだったという。

突然、坊さんが後ろを振り向いて、
「みなさん、大黒柱を亡くした当家の悲しみがわかりませんか。年寄三人、子供三人を抱えて、これから生きていく、嫁さんの苦しみを考えたら、闇の話や、色話し、悪口、噂話をしている席ではありません」

それから、しーんとした。啜り泣く声と読経が当家を包んでいた。角送りをする頃には雨も止んで、送る人達が泥道に列をつくって畑の方へ続いた。帳場・勝手場、共に次の準備をしていた。泥道を歩いて帰ってくる人達のため、大役を果たしてくる六道さまのため、お湯を沸かしたり、手伝い

衆にお礼の振る舞いをするためだった。

「いや、坊さまに怒られちゃったな」

「坊さまの力で雨もやんだな」

自分たちの反省よりは、坊さまの話しに花が咲いていた。まさは人の世の生き様を複雑な気持ちで味わった。新盆をむかえた頃、坊さまの姿が一層神々しく見えるのを感じたという。その後、その部落では葬式にはみんな慎んで静かだったという。「坊さまに怒られっから静かにやんだど」とのことで、暫く続いたそうだ。

まさのその後の生活は苦しみの連続だったが、みんな丈夫でよく働き、喰うことを確り身につけていた。魚を捕り、野菜をつくり、誰もがしていたことだが、工夫する知恵、努力は勝っていた家族だったと、まさは誇らしげに聞かせてくれた。

新しい制度も出来て助けられる面も沢山あったそうだ。まさは未亡人会の仲間に入り、みんなで語ったり、新しい時代の勉強をしたという。舅が言い寄ってきたり、部落の男が色目を使ってきたこともあったが、そんな時は山を登降り、若い時、夫と出会った畑、二人で仕事をしたあの畑へ走って行った。初めて行った時は驚いたという。畑の隅に背負籠があったそうだ。赤紙を手にした日、急いで山を降り・登り家まで走ってきた夫、どんな思いでここへ籠を置いて行ったのか。忘れたのか、否、ここへ又戻ってくる積りだったのだろう。落葉に埋もれた所は腐りかけ始まっている。まさは動かそうとしなかった。まして家に持ち帰ったり燃やすなどしないと決めた。夫が戻ってきた時のために、このまま置いておこうと決めた。
「あんた！ここで又会えるといいね」と、叫んだという。

“小さな山があつて、大きな山を支えている”
という言葉思い出して自分の人生を振り返ったら、一つ一つの小さな山を越えてきたのだ、とあらためて思える。と、笑顔で言っていた。あの畑へ行くことが、まささんの一つだったのだろう。私もそのような場所があるだろうか。



てらねい「那須の長楽寺」

小林幸枝

猫ちゃんに癒されると評判の那須・長楽寺へ行ってきました。

この「長楽寺」は栃木県那須郡那須町にあります。那須三十三観音霊場の第十二番札所でもあります。ここで飼っているネコは最初は生後2・3ヶ月の子猫を保護したことがきっかけでした。その後、色々あって、ネコとの日常をYouTubeにアップするようになり一躍知られ、今があります。

この毎日の朝食の風景や住職と猫のふれあい人氣となっています。

私が行ったときは、本堂の右手にある玄関で後朱印を拝受した時にもすぐ近くに猫ちゃんがいました。人馴れている2匹のかわいい子たちです。長楽寺には全部で6匹の猫ちゃんがいるそうです。



実は、私も猫6匹を飼っていました。私が、ちゅーるのお土産を上げましたら、お礼を頂きました。とても嬉しかったです。ご住職とは筆談でおはなしさせていただきました、とても癒されました。そして「また来ます。」と言って帰ってきました。



ネコ好きの人は一度行かれて見ては如何ですか？

風と共に 《理》(24) 大輪啓展

毎月違ったテーマにて書かせて頂きます。
今月のテーマは、「個性」

梅雨も間近に迫り、寒暖差と湿気、雨風等々、季節の移ろいに身体の調子は崩れていませんか？普通に、健康に、謂うは易いですが、維持していくとなると、これは言わずもがなでしょう。本格的な暑さを迎える前に、万全の体制を取りたいものです。

今回は個性、
今までにも軽く触れて来てはいますが、今は正に多様化の時代です。
個性の中には、育った環境や関わった人、趣味趣向、時として隠れた病気も、
側から見ただけでは、その人の行動・言動が理解出来ない事もまま有ります。

そもそも、十人十色、千差万別と、本来同じ人間は心人と居ないはずですが、似た様な格好、似たような思考と、他人と合わせたがと言うか、何故か個性を隠して多くの人が生活をしています。排他的な同族愛とでも言うのでしょうか、本来それぞれが個性を発揮した方が、もっともっと良い世界になる様な気がします、それを良しとし無い風習が過去から未来へ、これからも続いていくのでしょうか。

同じである必要はそもそももないのですから、似た

様な行動や思想の人達がグループを組むと言うところまでは理解出来ますが、違う個性に対しての攻撃・口撃はもつての外です。

世間ではよく心無い声が飛び交い、それを目の当たりにすると、とても残念な気持ちになります。相手への思いやりだとか、尊敬の念を常に持とうと言う、少しの心持ちで大きな変化があるはずですが、悲しいかな、今の世の中は真逆と言って差し支えないのではないのでしょうか。

勿論、個性を尊重しあえる世界も当然存在していますから、その様な地域・場所に集まっている人達は、同じ様にお互いにリス・ペクトし合いながら、良き関係を保っているのでしょう。

例え表面上、強張った顔をしていたり、面白い様な顔をしていても、その相手が見た目通りの感情を持っているとは限らないのですから、見た目の判断では本質的に相手を知る事は出来ません。

第一印象と言う言葉があるぐらいですから、初対面の印象はとても重要です。

前段で述べた方々には、とても不利に働きますね。当然、見た目通りの人もいる訳ですから・・・

そうだとすると、隠れた才能、感情、を無視する事もどうかと思います。

時間をかけて知り合えるのが、一番の近道ではあります、すれ違っただけの人との交流という意味では、かなり無理があります。

ですから、気の合う家族・親族・友達、知り合えただけでも奇跡的な事ですよね。

人間の欲は尽きません。

ですから、些細な事に感動していた純粋な時を過ぎて行くと、もっと大きな感動を幸福感をと、初心を忘れてしまいがちですよ。

幸せはそこら中に転がっているんです、見逃さずに小さな幸せを積み重ねて欲しいと思います。

個性だってそうです。

世の中にとっても役に立つ個性を持っている人が、影に隠れて埋もれている事もあるんです、自分からは中々発信出来ずに、モヤモヤしてる人が居るんです。

そんな人達に、少しでも耳を傾けてあげましょう。少しでも寄り添ってあげましょう。

きつとあなたに、周りの皆に大きな影響力を発揮してくれるかも知れません。

些細なきっかけさえあれば、陽の目を見られる人達が、大勢居るんです。

見た目、言葉、思想、自分と違ったら、どんな行動をとりますか？

排除しますか、興味を持って近づきますか？

あなたの一步が一言が、時に有用に、時に大損に或いは災いと成るのです。

多種多様な世の中で、自分の居場所を確立して保

護して行くのは当然ですが、視野を広げて自分に無い世界を知って行くのも、人生の楽しみとなるでしょう。

より良い世界の実現に向けて、皆で協力しましょう。それではまた来月に。



おすすめの本 17

菊地孝夫

今年も、そろそろアジサイの花がそちらこちらで咲き乱れる季節となりました。

花芽のついた一枝を切ってきて、間に合わせの花瓶に挿してみました。

隣の桑の木も、色づいた実をつけています。

残念ながら、チューリップの球根は、歯が出たところで枯れてしまいました。代わりにほかの観葉植物は、元気に育っています。

気温も日に日に高くなつて夏日となりました。そしてまた、豪雨による災害が今年も起きるのでしょうか。

〈新・コロ〉

ヨーロッパのウクライナ情勢におされて、新型コロナウイルスのニュースがいささか霞んでしまった。別に、国内における新型コロナウイルスの危機が去ったというわけではありません。

それどころか、一旦減るかに見えた全国の感染者数が、G・Wを経て増加に転じている。少なくとも現象の速度が緩くなっているようです。現政権が経済を優先して、コロナ対策を緩めた結果に他ならない。

ワクチンの接種率が、8割を超えて9割に迫っているのに、感染者が激減しないのは一体なぜなのだろうか？気温も上がり、湿度もあがってウイルスには不利な生息環境になったとも思われるのね。

免疫学の専門家にこのあたりの見解をお聞きしたいところです。

考えたくはないのだけれども、第6波のピークを一旦は迎えたのだから、もしかすると、第7波の始まりなのかも知れない。

また、6月からはこれまで規制してきた外国人観光客などへの入国制限も大幅に緩和する方針のようです。「技能労働者」の乳出獄にも支障が出ていることから、慢性的な人手不足に悩む、福祉関係・工場・店舗・農場などからの有形無形の圧力があるものと推察されます。

困ったことに、コロナと、ウクライナの所為で、今後の物価の高騰は避けようがない。年金は減る一方だし、様々な公共料金も、値上がりしていくのは必然と思われれます。

アメリカでは、FRB・連邦準備局が、インフレ対策として、金利を引き上げた。この影響を一

番もろに受けてしまったのが、日本の株価と為替といえます。

ここに来て、ようやく上昇に転じたかに思われた東証株価の「日経平均」も右肩下がりとなっています。

もともと、しっかりとした経済実態の裏付けのない株価が、日銀などの買い支えによってかろうじて持ちこたえているのが現状なのだ。

また、輸出に大きく影響する、対ドルの円相場も、ついに130円台に突入しました。それによって、輸入品の値段が、跳ね上がっています。

どうやら、「新型コロナウイルス軍」には、優秀な指揮官がいるらしい。

こいつの名前を、仮に新コロ君としよう。世界中に広がった新型コロナウイルスは、この「新・コロ」君の指導により、非常に有効な戦いを繰り広げている。

おかげで、われわれの日常生活にも様々な支障をきたしている。

また西欧・アメリカを中心に、幼児の急性肝炎が広まっているという。死亡率も高く、原因も不明だという。日本でも症例が確認されている。

もしも新たなウイルス性疾患の流行ということにでもなれば、そこから受けるダメージは大きいものとなるでしょう。

このところ、関東地方のみならず、全国で絶え間なく頻発している地震も、どこか不気味な存在に思えます。

連日マスコミでは、北海道の遊覧船の沈没事故

を取り上げていますが、あれは経営者の杜撰極まる体制と、それを許した指導・許認可の監督官庁である国土交通省の両者の責任でしかないと言えます。

確認したわけではありませんが、経営者の父親は地方議員であるということなので、そのあたりもこの緩い規制の一因なのではないのだろうかと思う。

ともあれ、木々や草花が勢いよく繁り、色とりどりの花々が咲き、陽気も良くなって一年で一番いい季節となりました。

気分を取り直して、暇さえあれば、近所の公園でんびりする時間を持っています。平日だとほとんど人もおらず、独占状態です。

お勧めの本は、今回お休みさせていただきます。

茨城県の難読地名とその由来 (24)

木村 進

曲田、百家、泊崎、古高、結佐

曲田 【まがった】 常総市 (旧石下町)
百家 【はつけ】 つくば市 (旧豊里町)
泊崎 【はつさき】 つくば市 (旧茎崎町)
古高 【ふったか】 潮来市
結佐 【けっさ】 稲敷市 (旧東村)

ここまでに稲敷市の古渡(ふつと)、常総市の国生(こつしょう)、土浦市の乙戸(おつと)、結城市の水海道(みつかいどう)、阿見町の追原(おっば

ら) など詰まった読み方をする地名を取り上げていますが、似たような読み方をする地名を拾ってみました。

これ以外にもまだたくさんありそうですが、少し読み難いものだけです。

これらの地名が何故このような読み方が踏襲され、残されてきたのかはわかりませんが、

(1) 茨城特有のことばを短くつめて発音したものがそのまま地名に反映された。

(2) 普通は訓読みのところを音読みで読んだためにつまった発音になった。

(3) もともとは音だけで残されてきた地域の地名を、あとから漢字を当てはめた。

などということが考えられます。

地名辞典などで由来などが書かれているものを載せてみます。

★曲田【まがった】常総市(旧石下町)

角川日本地名大辞典には、地名は小貝川の湾曲部にのぞんでいたことから曲り田(まがりた)に由来するとも。(趣味の結城郡風土記)、豊田城の南に位置することから豊田の「豊」の字の上部をとり曲田と称するようになったともいう(新石下村沿革誌)

と書かれている。慶長17年(1612)に開発された村という。

「全国の曲田地名」

- ・岩手県八幡平市曲田 (まがた)
- ・秋田県大館市曲田 (まがた)
- ・秋田県大仙市大曲田町 (まがりたまち)
- ・福島県河沼郡会津坂下町曲田 (まがりだ)
- ・茨城県常総市曲田 (まがった)
- ・栃木県那須烏山市曲田 (まがった)

・埼玉県深谷市曲田（まがった）

茨城、栃木、埼玉県の「曲田」の読みが同じであることに共通性はあるか？

★百家【はっけ】つくば市（旧豊里町）

角川日本地名大辞典によれば、江戸初期の慶長年間には石高約400石で百姓は40人ほどであったようだ。また壺本松と内原という2つの集落があったが途中で、壺本松はほとんどの農家が潰れて、内原に移ったとある。

結構古くからある村のようだが、昔100軒程の家があったということも確認できなかった。

ハッケ（崖下などという古アイヌ語などか）のこ
とばが先で、百家という漢字が後から当てはめられたものかもしれない。参考までに「百家の付く地名」として次ぎの地名があります。

・奈良県御所市五百家（いっか）

★泊崎【はっさき】つくば市（旧茎崎町）

泊崎は牛久沼の西北側の谷田川と西谷田川にはさまれ、牛久沼に飛び出した先端部分（岬）に位置します。岬の先端には弘法大師が大同年間（806～810）にこの地を訪れて座護摩を修めたといわれる「泊崎大師堂」があります。

古くから人が生活していたようで、縄文時代の小山台貝塚、下岩崎古墳群などがあり、1396年に岡野宮内少輔康朝が築城した「泊崎城（はっさきじょう）」があったとなっています。江戸時代の村名としては「泊崎村」が見られませんが、元々地区の名前にあった「ハッサキ」が城の名として「泊崎城」として使われ、後に地区の名前も「泊崎（はっさき）」としたのかもしれない。

★古高【ふったか】潮来市

角川の日本地名大辞典によれば、「古高村（ふたかむら）」は江戸時代初期から存在していたが、天保年間（1831～45）以降延方（のぶかた）村の一部となったとあります。その北側に築地とか大生（おおう）などの常陸国風土記に出てくる多氏（大氏）が住み着いたという古い集落がありま
す。この古高地区に「古高のわらび」（旅の僧侶がわらびに法力でアクを取り除き、すぐに食べられるようにしたため、それ以来この地方のワラビが柔らかくすぐに食べられるようになった）という昔話がある。また、「蛇妻坂」と呼ばれる坂があり、「近所の嫁を取るなど村を困らせた片岡池の大蛇が討伐され、坂途中に埋められた。」

という伝承もあります。かなり古い時代からの民話なども豊富なようです。

★結佐【けっさ】稲敷市（旧東村）

角川の日本地名大辞典によれば、結佐地名は室町期から見られる地名で、「ケッサ」と書かれていたという。地名の由来としては「結作神社」に由来するともある。平凡社の茨城の地名によれば、村としては、江戸初期の1620年に開発されたと見られ、1680年の水神社再建棟札には「結砂村」とあり、江戸時代に利根川の水運が発達し、利根川が当地で石納（こくのう）に向かって直角に曲がっていたため、結佐の曲目（まがりめ）と称され、航行に危険が多く船頭に恐れられていたそうです。

2022 年前期 えんじゅトークサロンお知らせ

「石岡の歴史を訪ねて」

常陸国の国府が置かれた古都・石岡と、繁栄を誇った明治時代の石岡の街並みを、貴重な資料や写真をもとに巡ります。

講師：木村 進（本会会員：郷土史家）

日時：6月25日（土）14：00～16：00

場所：BookCafe えんじゅ

石岡市上青柳 126

参加費：1500 円（珈琲とお茶菓子付き）

申込・問合先：下記の HP・FB からまたは電話でお申し込みください。

HP：<https://kominkaenju.xsrv.jp/>

Facebook：www.facebook.com/enzyuan

電話：野村 080-9295，木崎 090-4425-4679

ご予約は出来るだけ1週間前まで、当日の参加も可能です。



隠れキリシタン

京都府木津川市 今井 直

新たに開通した新名神・高槻IC⇔神戸北IC間は実に快適な高速道路だ。西日本最大級の宝塚北SAも賑やかでよいが、一つ京都寄りの茨木千提寺（いばらきせんたいじ）PAは、人家がほとんどない山中にあり静かで落ち着く。花壇の奥に据えられた10枚ほどの陶板画が人目を惹いた。地元の児童たちが描いた里山風景で、運転の疲れが癒される作品ばかりだ。その中になぜか教科書などで見たザビエル像が…。「当地は『隠れキリシタンの里』です」と案内板にある。



マルコポーロの『東方見聞録』によって、欧州でジパングの存在が知られ、やがて羅針盤が発明され大航海時代が到来する。1498年にヴァスコ・ダ・ガマがインド航路を開拓し、それから僅か50年後、南蛮人が日本に鉄砲を伝え、ザビエルがやってきてキリスト教の種を蒔いた。仏教伝来に遅れること千年である。直前にルターの宗教改革という大津波により、カトリックでは海外布教に乗り出したのである。

ザビエルはインドのゴアを中心に布教して回り、マラッカで日本の青年ヤジロウと運命的な出会いをする。日本にはまだイスラム教が伝わっていないと知り、ザビエルは日本での宣教を決意した。

ヤジロウに先導され、1549年鹿児島に上陸。当時、織田信長はまだ15歳、秀吉13歳、家康は7歳ということになる。ザビエルは、平戸・下関・山口を経て堺に着く。天皇から布教の許可を得ようと京都に上るが、戦国の世で京の街は荒れ放題、天皇に謁見も叶わなかった。ザビエルの日本滞在は僅か2年2カ月だったが、異境の地で言葉の壁を乗り越え、キリストの教えは確実に根付いていった。その後も南蛮から宣教師たちがやってきて、熱く伝道続けた結果、九州の大名たちは次々と改宗した。大村純忠・大友宗麟・有馬晴信がローマ教皇のもとへ少年使節団を派遣したのは、彼らの信仰の熱意を示すものだった。やがてキリシタンはおおよそ30万人に膨れ上がったという。

摂州高槻城主高山右近は荒木村重・織田信長・豊臣秀吉に仕えた武将で、千利休に師事した茶人でもあった。右近（洗礼名ジュスト）は如何なる苦難に遭つても、キリストの教えに忠実に従う生き方をした。一国の主でありながら身分の上下なく、隣人として常に尊敬と愛を心に、親しく接していたと云う。下剋上が当たり前の戦国の世にあつて、高槻の城下町はユートピアだったに違いない。

「高山右近の領内におけるキリシタン宗門は、かつてなきほど盛況を呈し、（中略）五畿内では最大の収容力を持つ教会が次々と造られた」（フロイス『日本史』）。1577年には一年間に四千人の領民が洗礼を受け、81年には、高槻の領民二万五千

人のうち、一万八千人（72%）がキリシタンだった。

信長の庇護のもと、安土城下にセミナーヨ（神学校）が開校したが、右近はその建設に深く関わった。授業科目はキリスト教理・ラテン語のほか、日本文学や音楽などで、信長もよく立ち寄ってはオルガンの音色に耳を傾けたという。後に長崎西坂の丘で殉教したパウロ三木も、このセミナーヨで神学を学んだひとりだ。三階建の豪華壮麗な大建築だったが、2年後本能寺の変により安土城と共に焼失した。右近は直ちに安土のセミナーヨを高槻城の傍に復元した。現在のカトリック高槻教会・高山右近記念聖堂の隣だったらしい。

天下人となった秀吉の関心は、南蛮貿易による巨額の富だったので、宣教師たちの活動は暫く黙認していた。しかし、キリシタンの「神の前では人は皆平等」「地上の君主より天の神に仕える」というのは、為政者にとっては誠に始末の悪い教えである。1587年に秀吉はバテレン追放令を発し、同時に黒田官兵衛・有馬晴信・蒲生氏郷・小西行長ら受洗大名は、信仰を棄てることを余儀なくされた。（大村純忠・大友宗麟は既に昇天していた）

右近の人柄にほれ込んでいた秀吉だが、「予に仕えたければ棄教せよ」と迫るも、頑として譲かない。千利休に説得にあたらせるも、右近は謝絶し信仰一筋の道を選んだ。そして大名の地位も俸禄も領地も全て捨て去る決意をしたのである。右近の俸禄六万石を現在の価値に当てはめれば、年俸四十

億五千万円という試算がある。ホームレスになる決断はひたすら信仰を貫くためだった。徳川幕府も禁教令を出し、1614年国外追放令により右近はルソン島マニラに流されてほどなく昇天、63歳だった。2017年、右近はローマ法王庁より福者（ふくしや）に認定された。④信仰に生きて天に召された者の尊称が福者で、最高位の聖人に次ぐ位である。ザビエルは1622年に聖人に列せられており、今年は400年目の節目である」

徳川家光の時代になると、キリシタン禁制が更に徹底された。厳しい宗門改めにより大多数が棄教しただろうが、人目につかない山中で秘かに信仰を守る集落もあった。千提寺が隠れキリシタンの里だったと判明したのは大正時代で、地元の郷土史家・藤波大超がキリシタンの墓石を発見したのがきっかけだった。墓標に「千」とか「干」と読める十字架と「慶長八年／マリア」の文字が刻まれていた。⑤地名は千提寺だがなぜかその名の寺院は今はない。現在の行政区域では茨木市だが、右近の時代は高槻領だった」

明治維新で禁教が解かれて半世紀が経っていたが、隠れ里では「知れたらお縄になる」と恐怖心が強かった。地元の旧家・東（ひがし）藤次郎宅に、先祖代々「決して覗いてはならぬ」と言い伝えられている古い箱があった。「あけずの櫃（ひつ）」と呼ばれ、屋根裏の梁にくくりつけられ、東家では、跡継ぎにしか櫃の存在を知らせなかったという。藤波が根気よく藤次郎を説得し、意を決して

開封すると、木製のキリスト磔刑（たつけい）像や南蛮人の肖像画などが出てきて、この閑静な里山が一躍世間の注目を浴びた。今では誰もが知っているあの「ザビエル像」だった。更にイエズス会創始者のロヨラを描いた「聖母子十五玄義・聖体秘跡図」やロザリオなどキリシタン遺物が、周辺の多数の民家からも次々と見つかった。これらは東家の隣に建つ市立キリシタン遺物史料館（入館無料）で展示されている。⑥ザビエル像は複製

落款からザビエル像を描いたのは狩野派の日本人絵師らしく、元々掛け軸だったのが額縁入りに仕立て直されている。また、どのような経緯で東家に持ち込まれたのかも全く不明である。

先頃、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」が世界遺産に登録された。潜伏キリシタンとは聞き慣れないが：？江戸期の禁教時代に、カトリックの教義を教えてくれる司祭が一人もおらず、250年の長きにわたり潜伏して信仰を守り続けた人々に対し、明治初期に禁教が解かれたあともカトリックに戻らず独自の信仰を続けた人々が隠れキリシタンと呼ばれる。つまり潜伏キリシタンは禁教期のキリシタンを指し、今は皆無である。現在、千提寺ではキリスト教信者は一人もおらず、よって教会もなく、この地域で密かに守られていたキリスト教信仰はすでに消滅している。

神戸の美術収集家・池長 孟（いけながはじめ）が、このザビエル像を熱望し譲ってほしいと懇願してきた。藤次郎は先祖代々が命がけで守ってきたも

のを絶対に手放す気はなかった。それで藤次郎は余りにもしつこい池永に断念してもらおうと、貳萬五仟円の高値をつけた。当時の大卒サラリーマンの初任給が五十円ほどだから、いかに池永でも諦めるはずだった。ところが池永は垂水の別荘を処分して、現金を藤次郎の前に積み上げたのである。前言を撤回するわけにもいかず藤次郎は断腸の思いで手放し、ついに池長はその悲願を叶えることとなり、池長美術館を開館した。しかし、戦局の悪化からやむを得ず閉鎖。幸い戦災を免れたが、コレクションの散逸を恐れて全てを神戸市に寄贈した。このような経緯により現在、「聖フラシスコ」ザビエル像は神戸市立博物館が所蔵している。池長の子息・池長潤氏は、カトリック大阪大司教区名誉大司教で健在だ。

藤次郎は先祖が命に代えてでも守り伝えた画像を手放した罪悪感から、東家は子々孫々この大金には決して手を付けるなと命じて、銀行に預けたという。子や孫たちは藤次郎の遺言を固く守り、その貳萬五仟円は銀行から一度も引き出すことなく、今も二万五千円のままという。



（参考文献）

『日本史のなかのキリスト教』

長島総一郎 著 P H P 新書

今年の「イチゴ屋さん」の手伝いもひと段落、
筍商法も終わり・・・次は、ブルーベリーかな???

・待っていました・・・！コロナ過で3年ぶりの
開催・・・。「まんまやコンサート」が、新規店舗
開店記念として、ピッコロデトリオ（ピアノ・
フルート・クラリネット）の演奏会が開催！！
納屋を改造して、新規店舗のそば屋になった場所
で生演奏。お馴染みさんも、初めましての方も、
不思議な手づくり感あふれる空間で和やかに楽し
い時間を共有した・・・。久しぶりの演奏を堪能！

・夏も近づく八十八夜、野にも山にも若葉が茂
る・・・。今日は毎年恒例の「中山開拓団？」に
よる、茶摘みの日・・・。急峻な林道に車を走ら
せ、車を降りた処から更に急斜面を登って行くと
茶畑が現れる。ここは戦後の開拓村、当時の住民
の方たちの苦労は計り知れないが、ここから見下
ろす八郷盆地は当時も今も変わらないと思う。な
んか悠久のロマンを感じながらの茶摘みだった。
それにしても6年前は篠竹やら雑草に覆われて
いてこんな茶畑が甦るなど思いもしなかっただろ
うに、有志の方たちの根気強い草刈りなどにより
茶摘みやら絶景など楽しませていただいた。摘ん
だお茶の新芽はさっそくお茶工場に持って行き新
茶になって戻ってくる・・・楽しみですね。

・オリーブのママさんから頂いたジャーマンアイ
リス、今年も可憐に豪華に咲き誇っています。毎

日とませて頂いています、また今年はツツジが見
事に咲いてくれました。朝起きて庭に出るのが楽
しみな毎日です。雨の日が続いている中、バイカ
ウツギ咲きました、雨もまた楽しいですね。

・朝5時カーテンを開けると、何やら怪しいヒト
影（猫影？）が・・・水槽やバケツに入れてお
いた魚たちが一匹もいなくなる現象が何度か、鳥
かなって思ったりしたが、あんだだったの、でも
深い水槽なのにどうやって採るの？

・コロナも収まってきたようだが・・・雨が降る
と肌寒く、晴れると夏日の厚さ？日々体がキツ
イ・・・これから迎える夏を思うと怖いようだ？



石岡地方のよもやま話

木村 進

(13) 柿岡サーカス

柿岡曲馬団というサーカス団が昔あった。
名前の通り馬などをつかって曲芸をしたりするサ
ーカス団で人気を博していたという。

そのサーカスの団長であった柿岡春二郎の墓が石
岡市柿岡の善慶寺（曹洞宗 禅寺）にある。

昔、テレビなどなかった時代にはサーカスの興業
が地方でも数多く行われ活況を呈した。
木下サーカスやキグレサーカスや、モスクワのボ
リショイサーカスなどが年配者には懐かしく思わ
れるだろうと思う。

その中でこの柿岡曲馬団は明治時代後期から昭
和初期まで人気の大きなサーカス団でした。

柿岡と名前がついていますが、本名は荒川春二郎
です。

この柿岡の地にお墓があるので、この地の人かと
思うと、これは少し違うようです。

春二郎は青森県八戸に明治4年に生まれます。

一家は祖父が会津戦争で戦死し、青森にやって来
ました。当時多くの会津人が青森に逃れてきた
といひます。

一家は貧しく、春二郎は、若い時に横浜に出て小
さなサーカス小屋の番頭となりいくつかの小屋を
渡り歩きます。

そして明治39年に柿岡一座（柿岡興業部）を興し、
明治42年に大阪で喝さいを浴びて東京両国や浅
草で興行を行って人気的一座になりました。

大正時代には大変な人気で、団員は150名以
上。当時はサーカス（曲馬団）がいくつもあり、
その中でも一番の人気で二番目が木下大曲馬（後
の木下サーカス）だということですから、人気の
程がわかります。

出し物は、「大曲馬曲乗」「猛獣曲芸（熊）」「自転車曲乗」などです。

当時の写真絵葉書などに「2頭の馬の背に3人の少女が乗って曲芸」「男性がバランス棒のようなもので片手倒立し、もう一方の手で2枚の皿回し」などのものがあります。

大正12年の関東大震災の時には、いち早く罹災者を慰安するためにチャリティ（2日間無料）で公演を行なっています。

その時の興業には「柿岡曲馬」「木下曲馬」「宮田洋行」「矢野曲馬団」「有田洋行会」「柴田曲馬団」「麻田洋行」などの名前がつづられています。そのトップが柿岡曲馬の名前となっています。

柿岡春二郎は大正三年に分家して、現石岡市の柿岡に戸籍を移します。

柿岡曲馬団という名前は前から使っていましたので、同じ地名のこの地に縁を感じていたのかもしれませんが。

しかし主に住んでいたのは宇都宮だったといいます。

ただ、吉生（よしう）から養女をもらい、一座はほぼ活動は終わっていた戦後になってこの柿岡に移ってきました。

昭和29年に柿岡で死去。84歳でした。墓は柿岡の善慶寺にあり、亀の背に乗った墓石です。



柿岡春二郎の墓：
亀の背に乗っている

この善慶寺は柿岡城跡に建つ柿岡小学校のすぐ隣にあります。

このお寺は、1590年に佐竹氏族の長倉氏（長倉義興）が、常陸大宮市の長倉城から柿岡城に移ってきたときに、やはり長倉にあった善慶寺がこちらに移ってきたといわれています。

現在長倉（御前山と那珂川を挟んで反対側）のその寺のあった場所には「蒼泉寺」というお寺が建っています。

しかし、この長倉義興（よしおき）は些細なことで佐竹義宣に逆らい、慶長4年（1599）常陸太田の正宗寺に幽閉され、1600年4月に死んだが、その死因は毒殺された可能性があるとされます。

これにより柿岡の長倉氏は滅んでしまいましたが、同じ年に、佐竹義宣も家康により出羽石（秋田）へ転封になってしまいました。



善慶寺

このように柿岡も佐竹氏系の長倉氏が治めていた期間は短い（10年）のですが、現在の柿岡のお祭「八坂神社の祇園祭」はこの長倉義興が始めたものだといわれています。

下士官の手記 4 燕石（えんせき）

（先月号からの続き）

大陸での日々 7 再び前線へ

×月×日

輸送船に乗り大陸に向かう。

×月×日

隊についてみると、わたしが留守をしている間に、部隊は大変なことになっていた。先任の下士官は皆、戦死・負傷・病気となって一人もいなかった。小隊長は、なりたてはややの中尉だ。

拓大出の志願兵であるという。こういうのが一番困る。口だけは威勢良いが、いざ戦闘になるとからつきし駄目だ。

この中尉の所為で、犠牲も多く出てしまった。私が復帰したので、前からいる兵隊は、ほっとして喜んだ。

連日のように激戦が続き、かなりの大部隊が幾度も襲ってきたという。ここが日本軍の通信拠点の一つと分かってしまったようだ。少し離れた丘の上には、建てたばかりの真新しい墓標が幾つも立っていた。いつかの晩に色話をした兵士も、多くがここに眠っていた。涙が流れて止まらなかった。

もともとの一個分隊の方は、他の通信隊の応援に回され、後の一個分隊は、少し離れたところの陸軍聯隊の応援に行っていた。

×月×日

補充として来たのは、教育隊上がりの初年兵や、その頃出来た少年通信兵ばかりだった。2, 3人の老兵も交じっていた。

「これじゃあ、話になりませんよ。」上級司令部に掛け合ってみたが、

「そっちで何とかしろ。」という無責任な答えだ。顔なじみとなった、近くの陸軍部隊にも頭を下げに行ったが、

「通信さんにこれ以上はなあ。」と言われてしまった。老兵の経歴を見ると、一人帝大卒がいた。さっそく呼び出して、専攻を聞いた。

「中国文学科だ。」という。

赤色分子と間違えられて、前線に送られてきたようだ。S・Aというこの2等兵は、自分の間自分の当番兵とした。

くだんの中国人の少年は、勝手に3等兵とした。

M大佐名で、戦時任官とした。

少年は大喜びで、わたしのおさがりのだぶだぶの軍衣を着て、

「ターレン。謝謝。」

を繰り返すのだった。

上の司令部からこの件で苦情が来たが、M大佐の名前を出すと、御咎めなしとなった。

Lという新米中尉は、M大佐とのこうしたやりとりを聞くと、固まってしまった。M大佐と言え、ゆくゆくは、通信部門のトップ間違いなしの人物だからだ。

とりあえず。あまりにも疫病の被害と戦闘の損害が大きいので、装備「衣類・毛布・食器」などあらゆるものを燃やしてしまうことにした。

大きな穴を掘り、装備品を投げ込んだ。軍服も投げ入れた。すっかり燃やしてしまえば、バイ菌もいなくなるだろう。ふんどしに長靴。モーゼルを擲掛けにし、軍刀を吊り、同じく裸の当番兵を従え、近くの一歩大きな輜重補給処に向かった。補給処の下士官以下、全員がこれには度肝を抜かれたようだ。

何時かの下士官たちも交じっていたが、今やこちらの方が格上である。二・三人の下士官を並べておいて、モーゼルでぶん殴った。

「きおつけ！。貴様ら通信隊だと思って舐めやがって。ろくな装備もよこさん。貴様らだけで戦に勝てると思うなら、やってみろ。我が通信隊は一切の電源を落とし、本土との通信もやめる。」

「それが嫌なら、一個小隊分の装備を直ちに届ける。」

云うだけ言って、扉を蹴り開けて帰ってきた。

×月×日。

翌朝、3台のトラックが着き、荷台から真新しい装備が山ほど降ろされた。3台目のトラックからは、酒保品や缶詰が降ろされた。部下たちからは歓声が上がる。

「ご苦労。受け取りは？」と聞くと、

「結構であります」と敬礼された。

襟章を見ると、曹長である。昨日の私の勢いを見て、てっきり新しく来た佐官だとも思っただけ。持っている軍刀も、下士官の持つものではない。髭の効果である。その晩は酒盛り、宴会である。もう一個の分隊も呼んできて、総勢50人を超す大宴会となった。

炎が夜空に高く舞い上がった。隣の陸軍からは何事かと当直将校が飛んできた。

「慰労会をしているだけです。」と言って、たくさん酒保品を土産に持たせ追い返した。

×月×日。

補給処襲撃事件の噂は瞬く間に広がり、上級司令部から苦情の無電が入った。結局、これもM大佐がもみ消してくれたようだ。悪名がすっかり広がり、強面の古参兵の連中も、下手に逆らうとなにをされるかわからない、と恐れをなしたようだ。どこまでも高く舞い上がる炎の奥に、女たちの白い体が次々に現れては消え、ゆらゆらと揺れているように見えた。その夜、女たちの名を呟きながらマスターベーションした。明け方近くまで何度も繰り返した。

×月×日。

分隊内の初年兵を教育し、S・A二等兵からは中国語を学んだ。3等兵・林少年はこの様子を丸くして見物していた。じきに簡単な会話ぐらいはできるようになった。中国兵の使っている暗号

文などはこの二等兵があつさり解いてしまった。

新兵たちは子供みたいに若かったが、選抜されただけあつて、短い間に次々に要領をマスターしてしまつた。

装備もすっかり新しくなつて、一級の陸軍歩兵部隊並の装備である。あり余つた時間で、引き続き戦闘訓練を始めた。いざとなれば、火器を持つて戦わなければならない。

補給所からは大量の武器が手に入つたので、新式小銃を持たせ、擲弾筒訓練、軽機関銃射撃と、歩兵並の訓練をした。古参兵に何頭かの馬を調達させて、乗馬訓練もした。毎日、日の暮れるまで訓練に明け暮れた。

×月×日。

時には近くの広い草原で二手に分かれて、実弾射撃訓練を行つた。育ち盛りだから、皆見る間に逞しくなつた。乗馬も巧みにこなすようになった。駐屯地の周りには、深い塹壕を掘つた。遮蔽用の頑丈な兵もめぐらした。すべては馬賊対策である。始めに連れてきた初年兵たちは、もう立派な一人前の兵士となつて、通信だけでなく、戦闘訓練もやすやすとこなすようになった。そのうち幾人かを上等兵に抜擢して、伍長勤務上等兵ということで、下士官待遇とした。

次々と送られてくる新兵を、15人ずつ分隊編成して、計6コ分隊に編成した。

最先任の古参兵を、小隊長にした。一人は例の腕時計の下士官Dである。今はもう、立派な腕時計をしている。兵站の者から手に入れて、渡したのだ。

×月×日。

「あの隊長に、この命知らずの部下があんなに大

勢居たんじゃ、おつかなくてそばにも寄れないぜ。」

「ああ、まいったくだ。」

「この頃は乗馬訓練もしているらしいぜ。」

「馬賊の間じゃ、モーゼル將軍とかいって、恐れられてるらしいってことだ。」

「その話は、俺もあつちこつちで聞いた。近頃は匪賊の連中も、おとなしくなっているからな。」

「どうやらこのあたりは避けて通っているらしいぜ。」

「おかげで、最近は何事もなくつたな。」

「通信隊に感謝だな。」

このあたりの陸軍の古参兵はこんな噂話をしていうという。それが本当なら、願ってもない、いいことだ。此処のD鎮は安全だということだからだ。古参兵たちの見立ては、おおむね当たっていることが多い。

×月×日

隣の師団司令部から連絡將校が来て、くだんのS・A二等兵とともに司令部に招かれた。差し回しの車で司令部に向かった。

「この二等兵を、暫く師団に貸してくれないか。」という。

「当番兵なので困る。」

「中国人の少年兵がいるではないか。重慶暗号がどうしても解けないのだ。協力してくれんか。」

どうやって調べたのか、どうやらこちらのことを詳しく知っているようだ。まあ、あつちも情報の専門家だから、このぐらい調べるのはお手の物だろうけれど。

「それなら、うちで一緒にやりませんか。共同でどうでしょうか。」

暫く相談していたが、

「士官を二名送るので、ひとつ宜しく頼む。」という。ここで貸しを作っておくのもいいだろうと引き受けた。

×月×日。

数週間かかってしまったようだが、漸く暗号が解けたようだ。勿論の事、くだんの二等兵の成果である。士官二名はS・A二等兵に深々と最敬礼して帰って行つた。

×月×日

師団から連絡があつて、

「幾人か送るので、そつちで教育してくれんか。」と頼まれた。

「また頼み事がありますか？もういい加減にしてくださいよ。そんなら、も一つ貸しですよ。」

「ああ。」

「ああ、そうだ、爆薬と導火線を分けてくださいよ。」

「そんなものの、いったい何に使うんだ。」

「あそこの岩山に、新しいアンテナを立てたいんですよ、岩に穴をあけなきゃならないんで。」

「わかった。だいぶん、世話になったから、いやとは言えんな。」

×月×日。

翌日、トラックいっぱい爆薬が届いた。

いまでは、師団からの出張組も加わつて、150人をはるかに超すちよつとした部隊になつてた。

×月×日。

岩山に爆発音が響く。連日のように大量の通信機などの機材が次々に到着して、稼働しだした。アンテナがあたりに林立した。

もはや中隊規模の通信隊となつていた。傷病兵

たちも、回復して次々に帰ってきた。小隊内は兵力が充実していった。聞くところによると近々、通信本部に改編されるとのことだ。

兵舎がいく棟も建てられている。通信機器の移動には迅速を要するという事で、輜重からトラック小隊を配属してもらった。

通信の任務ではたぐさんの実績を上げているので、一も二もなく許可が下りた。

中隊相当ということで、立派な兵舎が与えられた。技術兵も次々に到着した。大きな発電機も轟音を立てて動き出した。

付近の住民たちは、何事がおきたのかと大勢見物にきた。サーチライトをつけると、その真昼のような明るさにびっくり仰天している。このあたりはまだランプか蝋燭で暮らしている。

周囲にめぐらした高い塀の外には、いつの間にか小屋掛けの露店が何軒かできた。野菜や果物などを売っている。全く農民たちはたくましい。

夥しい量の爆薬を使って、岩山に穴をあける。辺りには常に轟音が鳴り響き、命知らずの馬賊たちも恐れて近づかない。

×月×日。

師団との間の有線電話のケーブルがしばしば切られた。付近のゲリラの仕業だ。思い余って、太いゴムホースを大量に仕入れ、ケーブルを地下に埋めることにした。来たばかりの初年兵たちは面白がって、埋め戻した後に雑草などを植えたりしている。

是で、ケーブルの切断は心配なくなった。

(後日、此処は東洋一と言われる巨大な通信基地となった。いみじくも、仮とはいえ此処の初代司令官となったのだ。不思議とこういう幸運のよう

なものに恵まれている。)

×月×日。

頼んでいた護衛の中隊がようやく到着した。

是でここは通信1個中隊、歩兵1個中隊の合わせて、2個中隊の駐屯地となった。更に、技術兵が、10数人。各地から送られてくる教育兵が常時20人ほどいた。専属のトラック部隊もいた。そこらの独立大隊よりも規模が大きい。戦闘部隊も充実したので、襲撃されることもなくなった。

×月×日

始終補給が途絶えるので、少し食糧も蓄えようと、一個分隊を従え、近隣の集落を回る。どこも貧しいのだが、気前よく十分な金を払うと、どこからかどんどん食料が現れてくる。乗って行ったトラックの荷台はたちまちいっぱいになる。

×日

今日もトラックで村々をまわる。今度は三台で回る。

金払いがいいということが知れ渡り、いくらでも手に入る。一個連隊分ほどの備蓄ができた。

×月×日

何処で聞きつけたのか、そちらこちらの部隊から、食料を買い付けに来る。それには思いきり吹っかけて売ることにした。鐘のない部隊からは、装備を置いていかせた。徴発してきたものだ。それが回りまわって元の者たちへ帰っていくわけだ。良心など少しも傷まない。

×月×日。

何処の村へ行っても大歓迎である。夜になると、寝床にそっと女が忍び込んでくることも一度や二度ではなかった。「大金を持った若い男が、いる。しかも金払いのいい気前のいい男だ。」

そういう噂が、いつのまにかこのあたり一帯にひそか広まっていたらしい。

帰ってゆくとときにいくばくかの金を渡すと、

「やっぱり大人は噂通りの好漢だ。他の日本人は、乱暴なだけで、お金もよこさない。けちんぼの下種野郎だ。」という。

×月×日。

新兵の内、目を付けたものに会計を任せる。才能があつたのだらう、たちどころに、どんどんと銭が増えていく。ほとんど役には立たない軍票も、掘立小屋の倉庫があふれるくらい集まった。たまげたことに一個師団分ぐらいはあるという。軍の内部ではどこでも十分通用するから、来たばかりの海軍の陸戦隊に売りつける。

医薬品も大量に買い付けた。病気になるものが後を絶たなかったからである。

くだんの中隊長は、実務は私に任せっきりで、事務所にも顔を見せない。最前線では実力がものをいう。口先だけのものはすぐに化けの皮がはげる。

古参兵たちも、私の命令にはおとなしく従った。この実力者がだれなのか、彼らは瞬時に嗅ぎ取るのだ。

名ばかりの中隊長は、すっかり影が薄くなつてしまった。

×月×日。

此処での勤務は昇進が速いと評判が立つて、転属を希望するものが後を絶たない。しかも給与もよいという。毎日のように人員が増えていく。

×月×日。

匪賊討伐に出動することになった。手不足の師団から頼まれてしまった。

「俺たちの任務じゃないですよ。」

というと、

「そう言わんで、なんとか助けてくれよ。ここだけの話だが、師団はもう、手一杯なんだ。借りはそのうちきつと返すから。」

と拝み倒されてしまった。

×月×日。

しかたなく重武装した二個分隊を従えて、トラックで匪賊を追撃する。

トラックの脇腹には、「つ」と大きく描いた。トラックには重機関銃を据え付けた。走りながら、馬上の匪賊を、手あたり次第重機関銃で撃ちまくる。匪賊たちはたちまち白旗を上げた。

頭目だけを縛り上げて連れ帰る。

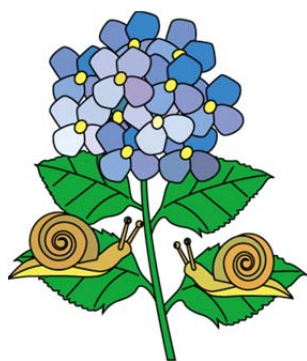
三度ほどこれをやった。

×月×日

遂には、こっちの「つ」のマークのトラックを見ただけで、手を挙げて投降してくるようになった。

部下たちも、すっかりベテランの兵士になっていて、頼りになる。士官室の金庫は、日・中の貨幣であふれんばかりになっている。新米の二等兵らには、それで旨いものを食わせてやれる。

(続く)



【特別企画】

打田昇三の太平記(22) 巻第九 3

○主上・上皇、御沈落の事

此の時代は後醍醐天皇が権威に執着して譲位の約束を守らなかった上に「なんちよう」だの「ほくちよう」だのと、耳鼻科の大病院並みに天皇が居たらしいから「主上」「上皇」と言われても誰だか分り難いが、光厳天皇・花園天皇・後伏見天皇などが該当するのかも知れない。いずれにしても「御沈落」は景気が良く無い表現であり、幕府は急激に増大した反幕府勢力の攻撃に晒されていたのであり、糟谷三郎と言う武士が進言した。

「味方勢力が減少して今は千騎に足りません。此の兵力で大敵を防ぐことは無理です。東の方は未だ敵が支配していないので、主上と上皇をお護りして関東(鎌倉)へ疎開してください。其の後に勢力を挽回し大軍を擁して京都を奪い返せば済むことです。取り敢えず勢多の橋を守っている佐々木判官時信の軍勢に警護をさせます。」

京都から脱出して近江国を抜ける場合、其処は佐々木の領地ですから問題は無いでしょう。其の先、美濃・尾張・三河・遠江は未だ幕府の威光が及ぶ地域なので敵は居ない筈です。鎌倉へは無事に着けるでしょう。鎌倉へ着いたならば、何よりも軍勢を擁して逆徒退治を実行して下さい！

此処(六波羅)は城では無いので敵を完全に防ぐことは出来ません。此の様な場所に天皇・上皇を留め置いて、名将ならば兎も角、名も無い武者に侵されることは悔しい限りです。」そこまで言われると頭の固い公家や幕府高官も成る程と思わ

ない訳にはいかない。先ず、時の皇后、幕府高官の家族から従業員など女性と未成年を逃がすことにしたのだが、何しろ人数が多い。更に普段は贅沢に暮らしていた連中なので自分で何かをすると言う感覚が無い。泣き叫び、うろたえ騒ぎ、嘆き悲しみ、別れを惜しみ、愚痴を言うだけの者たちを宥め賺かすのに無駄な時間を取られてしまった。其れでも、敵が攻めて来るのであるからノンビリは出来ない。

急かされる俣に北条一族も松寿丸(左馬頭友時)を護るように逃げ出すことにしたけれども行く当てが有る訳で無し、安全な場所は幕府本拠地の鎌倉だが其処は遥かに遠く、途中には敵となる勢力が満ち満ちている。それでも女性中心で主役が幼稚園児なので衣服を粗末なものに変えれば敵に発見されても何とか逃れられるであろう。と夜の闇に紛れて夜逃げを決行したのである。

かつて漢の高祖・劉邦は楚の項羽と七十余度対戦し遂に是を包囲した。所謂、「四面楚歌」の状況である。其の夜、討ち死を覚悟した項羽は美人で知られた妻の虞(ぐ)氏に別離の歌を贈った。

「力は山を抜き、気は世を蓋(おお)う

時に利あらず、騅(すい)は行かず、

騅行かすべきか 如何にすべき、

虞氏や虞氏や 汝を如何にせん…」

騅とは項羽の騎上馬らしい。当然かも知れないが、虞(ぐ)氏は悲嘆し、自害してしまった。

日本の事では無いからどうでも良いのだが項羽は二十八騎で四十万の敵陣に斬り込んで戦死した。

其の状況と同じ様に、どう見ても勝ち目が無い幕府軍に守られた北条一族は、天皇を擁してはいが其れが重荷となるだけで、夢も希望も無く、

六波羅の館を脱出したのだが行く当ても無く、

「何処へ行くのか？」馬も分らない俣に数キロを逃れて振り返れば、敵は幕府本陣に火を放ったようで、空は赤いが是から逃げて行く先は闇の中である。其れに加えて道中には山賊級の野武士が待ち構えて居り四方八方から矢を射掛けて来る。先ず、六波羅で権威を振るっていた北条時益が頸の骨を射られて馬から落ちた。其れを見た家臣の糟谷某が、親切に矢を抜いたので息が止まった。糟谷は泣く泣く主君の首を取り着衣の袖に包んで道端に隠してから、其の場で切腹して果てた。

警護の武士も付いてはいたけれども、人数が少ない上に、暗闇で敵の存在が判らず防ぎ様が無いのである。四条河原を通過する頃には「…落人を通るぞ。討ち留めて鎧兜・着衣を剥げ！」と親切に呼び回る人々の声も聞こえた。一行を見掛けた怪しい集団は天皇を獲物として襲う気で居る。

其れに加えて脱出した際は天皇・上皇の周りに供をしていた公家たちが、自然消滅したのか無断で退職したのか、今は大納言・日野資名、中納言・勘修寺経顕、中納言・綾小路重資、参議・禅林寺有光だけになっていた。当然ながら其れを知った天皇、上皇は源平時代を思い、涙を流すか愚痴を言うかしか能が無い。何しろ逃亡の身であるから贅沢を言えないのは当然だが、周りは全てが敵の状態なので何が起こるか全く分からない。何処から飛んで来たのか天皇の腕にも矢が立った。抜けば良いのだが、高貴な方は其れが出来ない。陶山備中守が駆け寄り抜いてあげたが出血がひどい。天皇が矢で射られるやな時代になった。

夜が明けて朝霧の中で周りを見回すと北方の山に野伏と思われる五、六百人が戦闘態勢を整え待

ち掛けていたので一同が茫然自失の状態になった中で、備禅国の中吉（なかがり）彌八が敵陣の近くまで騎馬で駆け寄り大音声で申し入れた。

「…忝くも一天の君（天皇）が関東へ臨行なさる所に何者が此の様な狼藉を為すのか…心有る者は弓を伏せ兜を脱いでお通しせよ。もし礼儀を知らぬ者なれば一々に召し捕り首を斬っても通るであらう…」ところが是を聞いた野伏軍団は大笑いをしながら「…如何なる一天の君にても、御運は既に尽きて都を落ちられるのであらう…是を担保も無しに通すことは出来ない。通りたければ、お供の武士たちが身に着けている鎧兜、太刀から馬までを全部捨てて、心置きなく行かれるが良からう！」と言いつ返し、然も其れを言い終わらぬうちに威嚇する様な喚声を上げたのである。

当然ながら中吉は怒り、家臣五騎を率いて野伏の群れに攻め込んで行つた。其の勢いに一旦は引いたものの、相手が六騎だと知った敵は反撃に転じて騎馬の者を含む二十余人が取り囲んできた。

中吉が、棟梁らしい人物に組み付いたので二人は落馬し深田に転落した俣で離れない。抑えられた中吉は腰の太刀を抜いて相手を刺そうとしたのだが転落の弾みで太刀を無くし鞘しか無い。そこで、

相手の腕を掴んでから声を掛けた。

「言うことが有るので聞かれよ！貴殿は私を恐れることは無い。私に跳ね返す力は無く刀も無いし、名も無い私を誰も助けに来ない…と言う事は貴殿が私の首を取っても手柄にはならない。

私は六波羅の下級武士で六郎太郎と申すが誰も其の名を知らないであらう…無駄な首を取って罪を作るより、もし私の命を助けてくれたならば其

の見返りに私が知っている幕府埋蔵金六千貫の在り場所を教えても良い…と思つて居るのだが…」

「埋蔵金」と聞いて相手は抜いた刀を鞘に収め中吉を助け起こしてから仲間に「攻撃中止」を命じ其の場を離れて中吉に酒を勧め品物を与えた。二人は密かに都へ行き六波羅の焼け跡を適当に掘り返したが埋めない埋蔵金が有る筈が無い。中吉は「…確かに此処に埋められていた筈だが、早くも誰かが掘出してしまったか？…貴殿に徳を与えようと思つたのだが…」と、残念そうに言つた。

一方、中吉の謀略まがいの作戦で道が開けた天皇の一行は其の日の中に篠原宿に着いたのだが安全が保障された訳では無いからホテル宿泊と言う訳にはいかず、天皇を歩かせることも出来ないので宿場から粗末な駕籠を借りて天皇を乗せ其の回りを少数の武士や僧たちが警護して夕闇の迫る中を先へ先へと進んだ。天皇の息子で仏門に入つていた梶井親王は天皇に同行していたが、先行きに不安を感じて何処かの寺に隠れようと、警護の武士に訊ねたのだが返事が無い。役に立たない高級僧侶が二人と真面目な駕籠かき以外は、闇に紛れて無断退職し勝手に居無くなったのである。

其の状況では天皇を連れて鎌倉を目指す長旅など出来る筈が無いので、取り敢えずは皇室に所縁の有る伊勢を目指すこととした。しかし其の道中には難所の鈴鹿峠越えがある。其処は徒歩で行くしかない。非常用に連れていた「天皇の馬」に鞍を付けて村長さんに与え、変装用の粗末な衣服と交換して貰つた。一行は僧侶の集団に化けて鈴鹿山を越え、どうにか伊勢神宮に辿り着く事が出来て三十余日、やがて京都が落ち付いてから都に戻り暫くは寺院に世を忍んで居たと言う。（続く）

「ふるさと風の会 文庫展」「ことば絵同好会展」

6月11日(土)～15日(水) 石岡市・まちかど情報センター

(最終日は 15 時まで)

- ・花ちらし野山はみどりの競演
- ・どうぞどうぞこちらにお入りなさい 大木桜木の言う

ふるさと風の分科会「風のことば絵同好会」:

「ことば絵」とは、風の景(かけ)を色彩とことば詩(うた)によって表現する石岡に生まれた表現です。

会員のこの一年間の遊創をご覧いただき、ご感想など頂けましたらと思います。

なお、風の会文庫も展示販売しております。

皆様のお越しをお待ちいたしております。

ふるさと風の会・ことば絵同好会 (担当: 兼平智恵子)

ふるさと風の文庫

会報「ふるさと風」に掲載してきたものを、文庫本に編集し、石岡市まちかど情報センター他で販売しております。お問い合わせは編集事務局へ。



ふるさと風の文庫の主な作品

- ・打田 昇三…私本家物語「罪と名声」
虚構と真実の谷間、歴史余話 他
- ・兼平智恵子…歴史の里いしおかめぐり
- ・伊東 弓子…御留川を歩こう
- ・木下 明男…我が労音史
- ・木村 進…地域に埋もれた歴史 (全 30 巻)
石岡地方のふるさと昔話、
常陸国における源平合戦 他
- ・菊地 孝夫…常陸旧地考 (上・下巻) 他
- ・白井啓治 (故): ふるさと物語 (霞ヶ浦の紅い鯨) 朗読/
ふるさと物語、他
- ・菅原茂美 (故): 遙かなる旅路 (1,2,3)

ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会会員募集中!

当会では、「ふるさと(霞ヶ浦を中心とした周辺地域)の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談:勉強会を行っております。会費は月額 2,000 円。(会報印刷等の諸経費)

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

HP <http://www.furusato-kaze.com>

木下 明男 090-4715-5527

兼平智恵子 0299-26-7178

伊東 弓子 0299-26-1659

木村 進 080-3381-0297

編集事務局 〒315-0014

石岡市国府 4-3-32 (木村)